
宇宙戦艦ヤマト×ふしぎの海のナディア ～ヤマト、N - ノーチラスと共に発進します！～

沖田五十六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙戦艦ヤマト×ふしぎの海のアディア 〜ヤマト、N・ノーチラスと共に発進します！〜

【Nコード】

N3774M

【作者名】

沖田五十六

【あらすじ】

白色彗星との戦いに勝った地球防衛軍。それから1年がたった。ガルマンがミラス帝国との同盟をした後のある日、正体不明の戦艦を発見したヤマトは、その後方にいた謎の艦隊に攻撃をくらう。その時、正体不明艦から入電が入った。こちらN・ノーチラス号ネモだ。と・・・。

この物語は、宇宙戦艦ヤマトとふしぎの海のアディアのコラボ作品

です。

また、原作と違うところがありますのでご了承ください。

第1話 正体不明艦（前書き）

登場人物紹介

ヤマト 宇宙戦艦ヤマト艦魂 元戦艦大和艦魂。昔の（第2次世界大戦時）の記憶がある。性格はまじめ。地球のためなら何でもする。服装は日本海軍第2種軍装。黒髪の腰ぐらいまである。腰には恩賜の軍刀。よく、仲間からお酒を飲まされるが、ほんの数分で撃沈。次の日の2日酔いもひどい。年齢20歳。

扶桑良介^{ふさつりょうけ} 宇宙戦艦ヤマト戦闘班班長。今作の主人公。性格はまじめで優しい。ガミラス戦役で母と弟を失う。ガミラス人に恨みを持つていたが、ある出来事をきっかけに、恨みは無くなった。酒には弱い、2日酔いはほとんどしない。年齢24歳

第1話 正体不明艦

〔西暦2202年 第11番惑星基地 ヤマト第一艦橋〕
今日もいつもどおり、星間パトロールするはずだった宇宙戦艦ヤマトに、基地から入電があった。

（こちら第11番惑星基地、上空約0.5光年に正体不明艦を発見。直ちに攻撃し、正体不明艦を確認せよ。）

「正体不明艦？」

艦長の古代進が通信を担当している相原に聞き返した。

「はい。それと、その後方に艦隊らしきものも発見している模様。」

「よし。すぐ攻撃しよう。扶桑さん、総員戦闘配置につけてください。」

「了解、総員戦闘配置につけ！」

この物語の主人公、扶桑良介がマイクに向かって言った。

「扶桑さん、どうかしたんですか？」

扶桑の隣に来たのは、宇宙戦艦ヤマト艦魂 ヤマトである。今日もいつものとおり、第2種軍服に、腰に恩賜の軍刀をつけている。

「ああ、ここの上空に正体不明艦が出現したみたいなんだ。」

「て、敵ですか!？」

「まだわからない。ともかく確認しないと・・・。」

「艦長！正体不明艦から通信が入りました！」

「メインパネルに繋げ。」

メインパネルに電源が入り、30歳後半の男性が写った。頭には、見たこと無い模様の入った帽子が載っていた。

「こちら、地球防衛軍所属宇宙戦艦ヤマト。そちらの所属と艦名を教えてください。」

（こちらN・ノーチラス号ネモだ。所属は無い。）

「所属が無い？何処から来たんですか？ネモ艦長」

艦長という言葉に反応したのか、少し怒った顔になった。

（艦長ではなく船長と呼んでくれ。我々は20世紀の地球から来たのだが・・・）

「20世紀の地球？今は23世紀ですが。」

（・・・それより、ネオアトランティスという奴らは知らんか？そいつらを探しに宇宙に出たのだが、ワープアウトしたときに後ろのアンドロメダ帝国に攻撃をくらったんだ。地球から来たというだけでな。）

「ネオアトランティス？知りません。そもそも、アンドロメダ帝国という国家も知りません。」

（すまないが、後ろのやつに対して警告してくれ。我々だけでは倒せない。）

「司令部に打電します。少し待ってください。」

そうしてメインパネルの電源が切れた。

「アンドロメダ帝国・・・何処の国なんでしょう。」

ヤマトが不思議そうに扶桑に聞いてきた。

「さあな。けど戦艦を持っているとかなりでかい国みたいだ」

「相原、司令部に打電。内容は（こちら宇宙戦艦ヤマト。第11番惑星宙域にN-ノーチラス号という船とアンドロメダ帝国の艦隊を発見。なお、N-ノーチラス号は攻撃を受けている模様。敵艦隊に対し、攻撃許可をもらいたい。）以上だ。」

「了解。司令部に打電します。」

数分後、司令部から返信があった。

「読み上げます。（まずは敵艦隊に警告。それに応じなければ威嚇射撃。それにも応じず、進入してくれば攻撃を許可する。）です。」
扶桑の隣にいたヤマトの目に恐怖が宿った。

「また戦争を・・・。」

そう呟いたのが聞こえた。

「ヤマト、大丈夫か？」

「だ、大丈夫です。」

「嘘だろ。顔に書いてある。本当は怖いんだろ？無理するな。」

「す、すみません。」

その時、古代が扶桑に言った。

「扶桑さん。ヤマトに伝えてください。また戦闘をしまっつまないと。」

「え？あ、わかりました。」

「・・・聞こえてますよ。こちらこそ、怖がってすみません。と言ってください。」

「古代さん、ヤマトから伝言です。こちらこそ、怖がってすみません。」

「・・・わかった。ヤマト、発進準備。」

「機関出力異常なし。」「レーダー、正常稼動中。問題なし。」「戦闘員配置済みです。」

「よし。ヤマト発進！」

（N・ノーチラス号 第1艦橋）

「後ろの敵の距離はどうだ？」

「距離変わらず。20万宇宙キロ。速力20宇宙ノット。」

「いつまでついてくるんじゃない。。。」

機関長が呟いた。

「ヤマトはどうした。」

「現在、本艦の後方2万宇宙キロの位置にいます。」

その時、ヤマトから通信が入った。

（こちら宇宙戦艦ヤマト。古代進です。後ろの敵は我々に任せてください。N・ノーチラス号はそのままヤマトの後方で待機してください。）

「わかった。すまない古代君。」

そして、通信が切れた。

「た、助かった・・・」

そう言ったのは、N・ノーチラス号艦魂、ノーチラスだった。

「ヤマト後方1万宇宙キロ地点で反転。ヤマトを援護する。」

ネモ船長の言葉に副長のエレクトラを除いた全員が驚いた。

「せ、船長！こっちは損傷してるんですよ！？主砲が生きているにせよ、爆発してしまいますよ！？」

測的長のエーコーが聞いた。

「構わん！機関出力最大！全砲門開け！ヤマトを全力で援護する！」

「ヤマト 第1艦橋」

「！N－ノーチラス号、本艦の後方1万宇宙キロで反転！本艦の右舷後方0．3宇宙キロで平行航行中！」

「N－ノーチラス号から入電！（これから本艦は、ヤマトを全力で援護する。以上。）との事です！」

「何だつて！？」

古代が驚いた。いや、この場所にいた者は全員驚いた。

「・・・相原、N－ノーチラス号に打電。（了解した。ただし無理はしないように。）以上だ。」

「了解。打電します。」

そのとき、森が報告した。

「ヤマト後方2万宇宙キロに艦影。ヤマト級宇宙戦艦一隻、アンドロメダ級2隻、主力戦艦2隻、巡洋艦4隻です。」

「ムサシか・・・助かった。」

ヤマトはそう呟いた。

第1話 正体不明艦（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしています。

第2話 戦闘開始（前書き）

登場人物紹介

ノーチラス N・ノーチラス号艦魂ネオオトランティスを探している時にアンドロメダ帝国の攻撃を受ける。そのとき、ヤマトのいる第11番惑星を通り、現在アンドロメダ帝国と交戦中。性格は少しツンデレで、まじめ。日本文化に興味あり。年齢20歳

フ란ツ・マルセイユ N・ノーチラス号の機関員。ドイツ人で日本語、英語、ドイツ語を話せる。ノーチラス同様、日本文化に興味あり。性格は優しいが内側はもろい。24歳

アンドロメダ 宇宙戦艦アンドロメダの艦魂。かなりの酒好き。よく、他の艦魂と酒を飲む。少し男らしい。元戦艦長門の艦魂だったが本人は忘れている。22歳。

こやまひつが
小山日向 宇宙戦艦アンドロメダの航海長。扶桑と同期。よくアンドロメダの酒飲みに付き合っている。性格は優しいが、ときどき上官に逆らう。

メカ説明

アンドロメダ帝国戦艦タイプA

全長300m 幅50m 機関 波動エンジン×1+補助×2

特徴 現在の戦闘機（F-15、F-14等）に艦橋と艦砲を付けただけの形。開閉式の翼を持っている。

主武装 艦首レーザー射撃砲台×4門 艦上部回転式連装砲塔 前1基 後2基 艦下部回転式連装砲塔 前2基 後2基 艦上部VLS 20セル 艦下部VLS 10セル 対空パレスレーザー砲 連装10基 4連装8基

第2話 戦闘開始

「ヤマト 第1艦橋」

「相原、敵艦隊の旗艦に通信を繋げる。」

「了解。メインパネルに切り替えます。」

メインパネルが付き、紫色の肌の40歳ぐらいの男性が映し出された。

「こちら地球防衛軍所属、宇宙戦艦ヤマト艦長古代進だ。貴艦隊は地球連邦の領域を侵している直ちに退去せよ。繰り返す、直ちに退去しろ。以上だ。」

（こちら、アンドロメダ帝国所属の艦隊だ。退去の意思は無い。我が帝国はつい先ほど地球連邦及びガルマン・ガミラス帝国に宣戦布告している。以上通信終了。）

そしてメインパネルが切られた。と同時に「レーダーに反応あり！ミサイルです！数20」との報告が入った。

「煙突ミサイル、打ち方始め！続いて対空パルスレーザー砲射撃開始！コスモタイガー隊は全機発進！N-ノーチラス号を護衛せよ！必ず生存して帰ってくるように！」

（こちらコスモタイガー加藤。了解した。必ず生きて帰る。）

「後続艦隊に連絡！面舵一杯！全砲門を敵に向ける！」

「ミサイル、全機迎撃に成功！」

「よし！島、面舵一杯！扶桑さん、全砲門開け！主砲及び副砲射撃用意！左舷90度に旋回してください！」

「了解、主砲及び副砲射撃室、聞こえているな！？左舷90度に砲塔旋回！仰角45度！射撃用意！」

（了解、あと15秒かかります。）

その報告を聞いた後、扶桑はちらと隣にいるヤマトに目をやった。やはり恐怖で震えている。

「ヤマト、大丈夫か？」

「だ、大丈夫だと思いますか？」

「はは・・・まあ大丈夫だろ？お前は地球連邦最古参の艦の艦魂だろう。それに・・・」

「それに？」

「俺が生きている間にお前を殺したりしない。絶対だ。」

「・・・扶桑さん・・・」

（主砲及び副砲射撃用意よし！いつでもいけます！）

「艦長！いつでもいけます！」

古代に報告した後、もう1度ヤマトを見た。さっきまで震えてたのが嘘のようなたくましい姿になっていた。

「扶桑さん、私決めました。もう怖がらないと。だって私は、大日本帝国海軍戦艦大和の艦魂ですから。」

「・・・よし！そのいきだ！」

「後続艦隊、全砲門射撃用意よし！それとN-ノーチラス号から入電。（我が艦も射撃用意よし。これより、貴艦隊の援護にまわる。）以上です！」

「雪、敵との距離は？」

「敵艦隊、10宇宙キロの距離。速度25宇宙ノット。」

「誤差修正+-0.5度・・・全艦、打ち方はじめ！」

（N-ノーチラス号 第1艦橋）

「ヤマト、発砲しました！」

「主砲発射！続いて誘導弾発射！撃って撃って撃ちまくれ！」

（同艦 機関室）

「フランツさん！」

呼ばれた男 フランツ・マルセイユは機関をいじりながら聞いた。

「ん？ノーチラス、どうかしたか？」

「どうかしたか？では無くて！戦闘が始まっているんですよ！？」

「だから？」

「ちよつと心配になって・・・」

ノーチラスは少ししょんぼりして言った。

「それよりお前、怪我してるじゃないか！すぐ病室に・・・」

「これはかなり前にした傷です！いまさら気づいても遅いです！」
そう言うのと、何処からともなくハンマーをもち立ち思いつきりフランツを殴った。

ガツンと言う音がしてフランツが倒れた。

「・・・いつてえ・・・」

「気づかないあなたが悪いんです。・・・でもありがとうございました。」

〈同時刻アンドロメダ級1番艦アンドロメダ 第1艦橋〉

「ヤマト、発砲！続いて、N-ノーチラス号らしき船からも発砲を確認！」

これに応じたのは、原作では戦死した、土方竜だった。

「我が艦も砲撃を開始せよ！アンドロメダの底力を見せてやれ！」

「了解！砲撃を開始します！」

その様子を見ていたのは、アンドロメダ艦魂アンドロメダだった。

「ふん。こんな数の艦隊、あたし一人で十分だって。」

「しょうがないじゃないか。今回の敵は未知の敵だし。」

これに答えたのは、同艦航海長小山日向だった。
こやまひなたが

「しよーが無い。早く殲滅して久しぶりにヤマトと佐渡先生と酒飲みてー。」

「つたく、ほんと酒のことしか頭に無いな・・・」

〈ヤマト 第1艦橋〉

「全艦砲撃開始しました！」

「敵艦隊、残り19隻！」

そのとき、艦左舷から振動がきた。

「被害報告！」

（左舷中部に被弾！交通区画に穴が開きました！）

「その区画の隔壁を閉鎖！負傷者は！？」

（いません。ただし、この船の艦魂はがいます！）

古代がその事に気がついて扶桑に聞いた。

「扶桑さん、ヤマトは大丈夫ですか！？」

「横腹から出血中です！戦闘指揮を変わってください！ヤマト、大丈夫か！？」

「大丈夫です・・・昔受けた傷に比べたら・・・」

「こちら古代、扶桑さんに代わり戦闘指揮をする！このまま、戦闘を継続しろ！」

（同艦 病室）

「佐渡先生、ヤマトが負傷しました。治療をお願いします！」

「わかった。なに、こんな傷3日もあればすぐ治る。」

佐渡先生が冷静に見た。その手にはやはり酒瓶を持っている。

消毒薬をヤマトの横腹の傷に塗っている途中、しみるのか「痛っ！」と小さい声で言った。

「よし。これで大丈夫じゃろ。」

包帯を巻き終えた佐渡先生が言った。

「ありがとうございました。佐渡先生。」

「なあと、心配無用じゃ。」

（同艦 第1艦橋）

「左舷上方からミサイル！数32！続いて右舷から21発！」

「迎撃しろ！煙突ミサイル発射！右舷対空ミサイル発射！これ以上ヤマトを被弾させるな！」

発射されたミサイルが煙を引いて発射されていく。

「ミサイル、49発を迎撃！4発はなおも接近中！」

「対空パレスレーザー発射！」

対空パレスレーザーが3発を迎撃に成功したがなおも1発が突っ込んでくる。

「1発が突っ込んできます！」

「総員、対シヨック防御！」

ミサイルが命中する100メートルのところで、緑色の光線がミサイルに突き刺さり爆発した。

「何があっただんだ？」

「あのレーザーは地球ではない。まさか……N-ノーチラス号か！」

数分後、ヤマト達が艦橋に戻ってきた。

「艦長、戦闘指揮代わります。」

「いや、その必要はなさそうです。今、敵艦隊は沈黙した所です。撃沈したのは25隻、大破が5隻です。その5隻からたった今、降伏してきた所です。」

「……そうですか。」

この戦いで死んだ人は、1隻あたり120人として合計3000人。いつもそれ以上の戦死者を出すもののやはり指示した人間だから罪悪感はある。

「その5隻を武装を解除して地球に連れて行きます。おい、島。ヤマトをあゝの艦の隣につける。」

「了解、機関微速。取り舵90度。ようそろー。」

第2話 戦闘開始（後書き）

設定としては、ヤマト艦内だ艦魂が見えるのは、佐渡先生と扶桑の2人だけです。

ご感想、ご意見をお願いします。

第3話 古くからの戦友（てき）（前書き）

登場人物紹介

ソンプレロ 主力戦艦級2番艦ソンプレロの艦魂。無言で無表情だが、ときどき感情が分かるときがある。読書好きで一ヶ月で60冊を読破し、さらに内容をすべて暗記している。おとなしい性格。年齢22歳

紫電実 しでんみのる 主力戦艦ソンプレム戦闘パイロット。戦闘機「烈風」に乗っている。どのような機体かは後日。性格は強がり。旧時代の戦闘機、特に零戦やP-51などが好き。年齢18歳

ムサシ ヤマト級宇宙戦艦2番艦ムサシの艦魂。頭は姉であるヤマトよりも良い。ただし、性格が天然で、全体的にのんびりしている。日本海軍時代の記憶はある。年齢19歳。

笹井庄一 ささいしゅういち 宇宙戦艦ムサシ戦闘パイロット。性格は優しいが戦闘になると性格が豹変する。別名「ローレライ」戦闘機「震電」に乗る。年齢18歳。紫電と同期で親友。

第3話 古くからの戦友(てき)

「ヤマト 第1艦橋」

「やつと終わりましたね・・・」

ヤマトが悲しそうな目を扶桑に向けていった。

「ああ、まだ味方の損害が無かったただけよかった。」

「でも、人殺しをしてしまったのは事実です・・・」

2人の周りに暗い雰囲気になっていたが、その雰囲気すら吹き飛ばす声がした。

「よお2人とも。」

その声を聞いた2人は凍り付いてしまった。ゆっくり後ろを向いた2人が見たのは

「「ア、アンドロメダ(さん)」」

「ひっさしぶりだな」

アンドロメダの後ろには小山が立っていた。

「お、小山。お前も来てたのか。」

「ああ、まあこいつに強制的に「あ？なんか言ったか？」・・・いえ何も・・・」

「そういえば、佐渡先生は？」

アンドロメダが小山に一発入れて、ヤマトに聞いた。

「い、いつものとうり、自分の部屋でお酒を飲んでますよ・・・」

「そうか、よし・・・」

アンドロメダがニヤと笑った。その笑顔がかなり怖かった。そのとき、4人のすぐ後方に光が生まれ、すぐ消えた。すると4つの人影ができていた。

「あ、ムサシ！久しぶりね！」

「はい。あたしはムサシですが、あなたは姉様にそっくりですね。」

「またか・・・」

扶桑が呆れて言った。

「私はその姉様よ！毎回再会する時にそれをツッコむ身にもなつてよ！」

「ムサシさんっていつもそうなんですから。」

ムサシの後ろから、ヤマトたちが知らない男性が言った。

「あれ？あなたは？」

「あ！すみません、自己紹介が遅れました。1ヶ月前にムサシに乗り込んだ、パイロットパイロットです。配置は戦闘機パイロットです。よろしくお願いします。」

ムサシの横に出て、敬礼して言った

「こちらこそよろしく願います。笹井さん。」

そう言われた笹井は心なしか頬が赤くなった。すると、ムサシがムツとした顔で笹井を睨んだ。

「ど、どうしたんですか？ムサシさん？」

「庄一さん、ちょっとよろしいですか？」

ものすごく怖い笑顔で言った。

「わ、わかりました……。」

そして、笹井とムサシは帰っていった。

「ありやー、ありや本気で怒らしたな。」

「……ホント……。」

そう言ったのは、主力戦艦級2番艦、艦魂ソンプレロと同艦戦闘機パイロットの紫電実しでんみのるだった。

「お、紫電来てたのか。」

「扶桑先輩、久しぶりです。」

「どうだ、最近は。」

「はい。怪我無し。病気無し。ついでに金も無しです。」
苦笑いしながら隣にいるソンプレロをちらと見た。

「……ごめん……。」

「別に気にしなくていいよ。でも、1ヶ月で60冊も本を読まないでほしいな……。」

「……することが無い……。」

「だーもう！あたしが入るところねえじゃん！というか話に入れさせる！」

「げーアンドロメダ！お前いたのか！という事は・・・」

紫電の顔から血の気が引いた。

「よし紫電君。ちょうどいいところに。ちょっと佐渡先生のところまで行こうか・・・？」

「い、嫌だアアア！」

アンドロメダに捕まって紫電が絶叫した。

「笹井イ！帰ってきてくれえ！俺は酒は飲める年齢じゃねエ！」

そう絶叫したあと、エレベーターの中に詰めこまれて降りていった。その後をソンブレロが追っていた。

「やれやれ、アンドロメダの奴、強引だなあ。」

そう言つて小山も降りて行った。

「・・・あのさあ、ヤマト。」

「・・・なんですか？」

「・・・紫電って生きて帰ってこれるかな・・・」

「・・・無理でしょうね」

そのとき、またもや後ろから光が生まれ、すぐ消えた。そこに居たのは、ノーチラスとマルセイユだった。

「えっと・・・。あなたがヤマトさんですか？」

ノーチラスがヤマトに聞いた。

「そうですが・・・あなたは？」

「私はN・ノーチラス号艦魂、ノーチラスです。そしてこちらに居るのが、」

「フランツ・マルセイユです。N・ノーチラスの機関員をしています。」

「そうですか。私はヤマトと言います。こちらが私の艦の戦闘班班長の扶桑さんです。」

「扶桑良介です。今後はよろしく。」

そのとき、エレベーターの扉が開いてアンドロメダが出てきた。

「おい！2人とも！何もたまたしてるんだ？早く来いよ！・・・つてこの2人は？」

「ああ、N・ノーチラス号のノーチラスとフランツ・マルセイユだ。」

扶桑が答えた後、アンドロメダは小さく「よし！」と言って、2人に言った。

「2人とも、酒飲まないか？」

「は？（え？）」「」

「なに、新人さんの歓迎パーティだ。もちろんヤマト達も来るよな？」

「いや、俺達はちよつ「来・る・よ・な？」・・・はい。」

扶桑に怖い笑顔ではいと言わせた。

「よし、じゃあ行こうか！」

「（だれか！助けてえ！）」「」

心の中で助けを求める扶桑たちと

「（異文化に触れるいいチャンス！）」「」

と楽しみにしているノーチラスたちがいた。

その翌日、ヤマトと主力戦艦ソンプレロ、N・ノーチラス号の機関が不調、おまけに武装部分までが故障するという事態が起こった。その日、ヤマト以下10数隻と拿捕した戦艦5隻、N・ノーチラス号を地球に回航しろ、という命令が司令部から送られてきた。が、戦艦5隻を牽引する上に、さらに3隻の故障艦を牽引することになり、地球帰還までに2日かかった。

第3話 古くからの戦友（てき）（後書き）

ご感想ご意見等をよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3774m/>

宇宙戦艦ヤマト×ふしぎの海のナディア ～ヤマト、N - ノーチラスと共に発

2010年10月9日13時58分発行